

# パレスチナ難民キャンプで子どもたちに絵を教える

かみじょう ようこ  
上條 陽子

パレスチナやイラクをテーマに、六本木のギャラリーで2ヵ月間個展を開催した。それが終わるとすぐに、今年も約1ヵ月(8月)、ベイルート(レバノン)にあるパレスチナ難民キャンプ、サティーラへ子どもたちに絵の指導をするために出かけた。

私は50歳の時、耳にできた腫瘍を取り除く2度の手術で右側の聴覚と平衡感覚を失っている。術後顔面麻痺、舌の半分の感覚がないなど後遺症が出たが、目と手は元通り動いたので、描き続けられることの幸運を天命と感じている。絵を通して子どもたちと生きる幸せや喜びだけでなく、辛さや悲しみ、痛みを共有することができると思っている。

サティーラには6歳から大人まで絵の好きな子、絵を描くことを必要とする人、約70人の生徒が待っている。きっかけは、5年前のエルサレム、ラマラ、ガザでの巡回展に遡る。理不尽な現状を目の当たりにし、若いアーティストたちが画材に困っていることを知った。帰国後の個展で会場の片隅に画材の支援を呼びかける段ボール箱を置いたことが思いがけず新聞に取り上げられ、絵の具が集まった。しかしガザは既に紛争が激しく送れない状況になっていた。時を同じく「パレスチナ子どものキャンペーン」がレバノンに住む難民の子どもたちに絵の指導をしてほしいと要請してきた。子どもセンター(レバノン内に10ヵ所ある)は親のいない子どもの世話などを行っているが、私たちはそこに泊まりながら絵を指導している。施設はそれほど広くなく、人手も足りない。

難民となって五十数年、美術教育はいつも後回しにされてきた。贅沢である、画材がない、人手も時間もない、という理由で省かれてきた。描くことは、物を見る眼を耕し養うこと、物の存在を認識することである。見えないものを見、考え、感じることで、幅広く深い思考力を育む。さまざまな形を知り、大きさ、位置、背後の空間の処理を、どう表すかに突き当たる。描きたいと思うものを見つめ生命のエネルギーを感じて、色彩豊かに情感込めた作品を描く。創る喜びは生きる力であり、平和への希求につながる。

■プロフィール 1937年神奈川県生まれ。絵は独学。多摩美術大学客員教授。女性初の安井賞(第21回、1978年)を受賞。1982~83年文化庁在外研修員としてフランス、ドイツに滞在。2001年より毎年レバノンの難民キャンプで絵画指導をしている。渋谷バルコ、スペース・ニキ、池田20世紀美術館、空想ギャラリー、石川県立美術館、イセアートファウンデーション(New York)などで個展開催。「東京からの七天使(パレスチナ)」などのグループ展に多数参加。